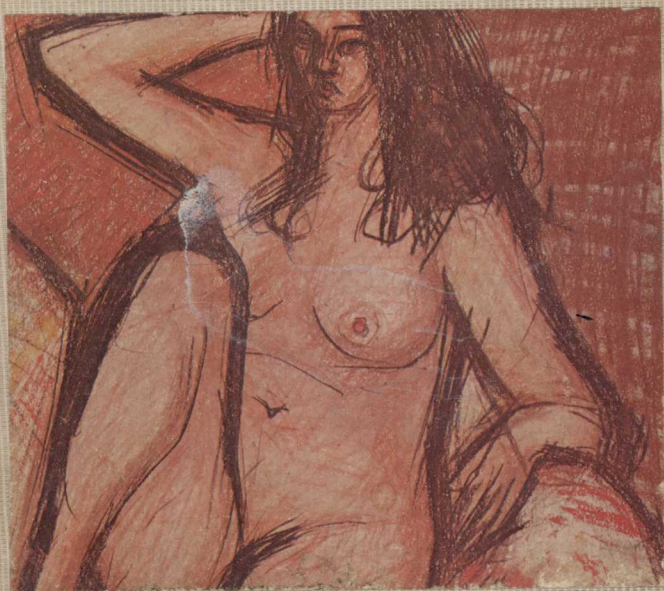




# 白い椅子

丹羽文雄



講談社

© Fumio Niwa 1972

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は  
お取り替えます



白い椅子

昭和四十七年五月十五日第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二番二

郵便番号 一一二

振替 東京三九三〇

電話 東京〇三(九四五) 一一二 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 九八〇円

## 目次

|      |     |
|------|-----|
| 花の売店 | 153 |
| 年末年始 | 132 |
| 邂逅   | 104 |
| 茶室   | 76  |
| 未解決  | 67  |
| 麻雀   | 40  |
| 婦長の死 | 30  |
| 女客   | 7   |

春

176

告白

211

ある時期

247

秋の異変

267

崩壊

278

翌年の秋

340

女ごころ

351

装画／林  
装幀／原  
弘 武

白  
い  
椅  
子



## 女 客

### 一

山門をくぐると、矢那子は正面の本堂と向き合った。見あげるような屋根の大ききだった。ゆるやかな傾斜をもった屋根が、いまにも矢那子のところに迫るようであった。静かな、ひろい境内であった。

「観光客のいないお寺はいいな」

と、英資がいった。

「朝早くからこの静けさがつづいていたようね」

育子が母の同意を求めるように矢那子をふりかえった。

「曜さんにいろいろと聞いてたけど、聞くと見るとは大きなちがいですね」

これほどの大寺とは矢那子も思っていなかった。京都にはこれより小さい寺がいくらかもあった。

「大きな天水だ」

英資が天水に近付いていった。屋根から落ちる雨水をためておく盤は、青銅で出来ていた。

「早く曜さんに会いましょう」

三人は庫裡に向った。庫裡は本堂よりも大きくながめられた。

庫裡の玄関が御所風に出来ていた。その手前に小さい築山があった。三本の蘇鉄が葉を茂らせている。楓と松と蘇鉄から出来ている築山だが、それが正面玄関をかくしていた。正面玄関と内玄関に、それぞれ石畳が続いている。

「箒の目が消えていない。観光客にみせるための箒の目はありがたくないが、箒の目はこうした何気ないようにつけてもらいたいよ」

何かにつけてひと言意見をのべる癖がついた英資の年齢を、矢那子はおもしろいと思っている。

内玄関にはいった。案内の声に応じて、五十年配の、白衣の男がかまちの畳にひれ伏すようにして、

「大内さまでいらっしゃいますか。お待ち申し上げておりますた」

内玄関からかまちに上るとき、育子は弟と顔を見合わせた。一米ほどの高さである。その間に一段しか段がついていなかった。小柄な女のひとには、ひと苦勞であろう。

矢那子、英資、育子の順で、庫裡の廊下を歩いた。庫裡は静まりかえっていた。いかにも奥深い感じがした。育子が思った。

——もしかしたら、私がこのお寺に妻として納まっていたかも知れないのかわ。

中庭の廊下に出た。庭石以外の地面に、びっしり苔がついていた。石灯籠も苔むしている中庭をとりかこんでいる廊下の白壁が美しかった。茂みをすかしてみるせいか、白さがあざやかであった。

奥の書院に通された。座ぶとんが客待ちがおに敷かれていた。

四枚の大ガラス戸が、裏庭に面していた。ま新しい建具であるところからみると、これは障子と取り換えられたものらしい。裏庭の樹木が座敷の中に押しこんでくる感じであった。母の顔がすこし青くみえるのは、みどりのせいだと育子は、自分の顔にもみどりの反射を感じた。

## 二

院代ふうの男が去ると、

「このひろいお寺の中で、曜さんがひとりでいるの？」

育子が母に訊いた。

「曜さん、再婚の意志がないらしいのです」

確信のあるような口調であった。

「でも、檀家がすててはおかないでしょうね」

「そうね」

と、気がないようだ。

廊下の板の間を鳴らすようにして、いそぎ足の気配がおこつた。親子はちょっと緊張した。

「やあ、いらっしやい」

陽気な声といっしょに曜がはいって来た。

「早かったですね。もつとおそいかと思つてた」

曜は、矢那子から育子、英資と視線を流した。

「ゆうべは賢島のホテルに泊って、今朝早く、二見を見物して、お伊勢さんにおまいりして、いきあたりばつたりの電車にのりました」と、矢那子が答えた。

「面白かった？」

曜が姉弟に訊いた。ふたりはだまつていた。曜を見つめている。「どうしたんだ、へんな顔をして……？」

「だって舞台の鳴神上人をみてるような気がするんですもの」

育子がミニ・スカートを気にしながらいった。

「鳴神上人？」

「ぼく、べつのひとかと思つた。だって曜さんが、白いきものを着てるんだもの」

「ああ、この白衣か」と、笑つて自分のすがたをみた。「これが商売の正服だよ。この上に法衣をきるのだ」

「うちで見なれていた曜さんとちがうんだもの、おどろいちゃった」

春秋二回、曜は京都の本山に向向いた。学生時代の下宿である矢那子の家に泊ることにしていた。

「都会のお坊さんは、背広に輪袈裟をかけたり、ズボンの上に道服を着ているが、田舎では、田舎のおじいさんやおばあさんは、やっぱり白衣に法衣を好むんだよ。郷に入つては郷に従えというだろう」

「すみません、ぼく、予備知識がなかったの……」

矢那子はにやにやして、会話をきいていた。矢那子にも曜の白衣すがたが、思いがけなかった。そのくせ伴僧の白衣すがたにはおどろかず、それであたりまえの気持だった。四年間わが家で世話した曜の感じと、白衣がうまく結びつかなかった。矢那子はべつの曜に接したような新鮮な印象だった。それはきわめて快いものであった。

「鳴神上人は髪を長くして、丸くて太い帯をまきつけていますが、

曜さんの白い角帯はよく似合います。清潔な感じで……」と、矢  
那子がいった。

### 三

「これでも私用で出かけるときは、タートル・ネックですからね」  
夜になり、メンバーが足りないときは、細川つね子の家から  
女中が曜を呼びにきた。すると、曜は表通りを避けて、裏道をと  
った。

「曜さんがお寺のひとつであることは知ってたんだけど、曜さんの  
日日の生活までは想像出来なかった」

英資にはまだおどろきが続いていた。

「もともと京都の街でも、近ごろは白衣すがたがあまり目につか  
なくなってるものね」

「毎日、精進料理？」

「馬鹿いえ。さんまを焼く臭いが庫裡の台所に充満するときもあ  
れば、油でじゅうじゅう肉が焼ける音もたてるよ。精進料理は、  
むしろ珍しいくらいだ」

「安心した、精進料理かと思ってたんだ」

「わざわざ精進料理をたべに京都のお寺にいくひとだってある  
よ」

育子は、もし自分が曜の妻になっていたならばと想うと、鳴神  
上人には当分なじめないだろうという気がした。白い法衣とミニ  
が、あまりにかけはなれていた。

英資が誘い、育子も庭下駄をはいて裏庭に下りた。裏庭にふか  
い池があった。水面からはさほど深くなかったが、土堤が高かつ

た。

「あの草むらね？」

と、矢那子が曜にいった。

「草むら？」

「蛇が蛙を追って、あの草むらを落ちるように池にとびこんだとい  
う話をしたでしょう」

「ああ、あの話」と、曜は四十三歳の矢那子の顔を肌をより合わ  
せるようにながめやった。ふかい二重瞼である。髪をむぞうさに  
束ねているが、むぞうさにみえるように凝っているのだ。きもの  
の趣味は洗練されている。大内薫資は、美人画の大家であった。  
矢那子をモデルにした絵は、美術館にも納められている。矢那子  
はのち添であったが、美貌ゆえに、はるか年上の大内に嫁してき  
た。大内薫資は十二年前に死亡した。

育子と英資は、裏の築山の方へいったらしい。そこには竹やぶ  
があった。京地方の竹やぶには及ばないが、毎年だけのこがとれ  
た。矢那子がガラス戸に顔を近づけて、育子らを目でさがしてい  
たが、

「どこへいったのかしら、みえないわ」

と、坐り直した。膝を折って上半身を正しく戻す直前、

「会いたかったわ」

小さくいった。曜はだまっていた。

「とても愉しみにしてたの。子供のための旅行だったけど、私の  
ための旅行でもあったわ」

曜は微笑した。

「夕の勤行があるんでしょう？」

「もちろん」

「是非参詣させていただきます。舞台でのあなたの声がききたいの」

「お経の声？」

「いい声だもの。低音で、ひびきがあつて……」

#### 四

裏庭に出ていた育子と英資がもどってきた。育子が微笑している。

「何かあったのですか」

矢那子が問うた。

「竹やぶがありました。いちご畑がありました。畑がありました。

みかんの木がありました。杉の木立もあり、墓地がなくなったらしい跡には、あたらしく畑が出来ていました。本堂の裏側も、廊下の板囲いも時代がかつているのに、ボンベの大きなのが二本、ブロック塀にかこまれているのをみて、時代を感じたわ」

曜が笑つて、

「それで思い出した。風呂はわいているはずだ。英資君からおはいい。バス・ルームは、この床の間のうしろにある」といった。

「じゃ、ぼくが先にはいろう」

「ゆかたは、脱衣場にあるよ」と、曜がいい足した。

英資が出かけていくと、床の間のうしろの方で間もなくすべりのよいガラス戸の聞く音が聞えた。

「ここにいると、旅館のはなれにいるような気がするわ」

育子がつぎの間をながめていった。

「床の間をごらん」

と、曜が顎で示した。そこには、慈悲と書かれた軸がさがつていた。

「先代の法主の書かれたものだ」

「お寺さんらしいものね」

「父のときまでは、風呂場が庫裡の端にあつた。お客さんには、庫裡の端から端に通ってもらわなければならなかった。焚き口が台所に近くなければ不便だからだ。いまはボンベという便利なガスがあるから、バス・ルームはどこでもつくられる。中に自動開閉器がついているから、中から熱くすることも、とめることも出来る。岡崎では、いちいち土間をわたらなければならないから、不便だった」

京の岡崎の大内家は、昔からの風呂の位置であつた。家の中に土間がとおっているのは、何百年も昔からの京都の習慣である。風呂場から下駄を鳴らして居間に上る。下駄の音が、日日の感覚になっていた。矢那子がスリッパから、英資の肌着のかえを取り出して湯殿に向いた。もどつてくると、

「ひろびろとしたバス・ルームですね。ゆうべ泊ったホテルよりも感じがいいですよ」

英資が湯から上ると、育子がいり、追うように矢那子も帯を解いて、湯殿に向つた。

「裏の築山に上ると、向うに国道がみえるわ。バスやトラックや自動車はひっきりなしに走ってるの。戦災でも、川のこちら側は焼けなかったのね。曜さんのお寺はたすかったのね」

「丹阿弥市の端だったから、たすかったのです。あの本堂を焼か

れては、二度と建たなかったでしょうね。あの表通りが、昔の東海道ですよ。ここに宿場があったのです」  
母娘は話合った。

## 五

育子が出ていくと、矢那子は首まで湯にひたった。すりガラスに西日があたっていた。湯がないかのように澄みきっている。水面にわずかに垢が浮いていた。子供のものである。矢那子は、湯桶ですくって捨てた。

両の乳房をかるく押えた。内部のものをたししかめるふうであった。曜が大学を卒業して、岡崎をひき上げた時、これきり会えなくなるような気がした。曜の父親の死、つづいて曜の結婚を知らされた。心泉寺の住職となった曜は、春秋二回、京都の本山に來た。自分の家で泊った。卒業以来一年間も会わないでいたわけではなかった。京都にすれば、数日滞在した。ときには檀徒の死で、いそいでかえることもあった。が、これまでは訪ねてくるのを待つよるこびであった。今度はちがう。わざわざ自分が会いに來たのである。心泉寺における曜の日日を知りたかった。再婚をいそがない曜の本心が知りたかった。期待が胸にある。矢那子はそれを両手でたしかめた。

「二人も子供を生んだのに、すこしもからだの線が崩れていない。貪婪に生れついているようだね。子供を生んだこともかえって美の滋養分になっているようなたくましさだ」

と、大内薫資がいった。四十の坂を越えた女盛りを、主人は知らなかった。気の毒だと思う。さらに傑作が描けたかも知れない

のである。

明るすぎる浴場だった。タイル張りが明るさを強調した。岡崎の湯殿はあれ以上ひろげようもなく、明りのとりようもなかった。

「そろいのゆかたで、旅館なみだ。お寺って、こんな設備が必要かしら」

英資が両袖を奴服のようにひろげた。つぎの間に、三面鏡が用意されていた。

「一年に二、三回、何人かのお寺さんが集まるのです。そういうときのために用意されているんですよ」

鏡の中をのぞきながら、矢那子が答えた。

——曜さんには悪いけど、奥さんが亡くなっていたから、よかった。奥さんがいては、こうものんきに厄介にはなれなかった。

難産がもとで、曜の妻の千歳は嬰兒とともに二十三歳の生涯を閉じた。

——この三面鏡は、奥さんの遺品ではないか。

しかし、曜は、妻の道具は一切実家の専寛寺に送りかえしたといていた。桑材の、木目もあざやかな高級品であった。

「左手の女竹の茂みと、太い幹のあいだに、にじり口が見えるでしょう」

と、育子が母に教えた。

「あそこが茶室ね。私もそうではないかと思ってました」

矢那子は、裏千家の師匠であった。だれでも弟子にとるというのではなかった。十五、六人の弟子が通っていた。

黒い法衣をきた伴僧がはいってきた。

## 六

「勤行の支度が出来ましたので、お知らせに上りました」

「本堂でございますね」

と、矢那子が訊いた。

「はい」

伴僧が出ていくと、矢那子が、

「風呂上りのゆかたがけでは本堂に詣るわけにいきません。着換えましょう」

つぎの間のスーツケースのところに立った。育子も英資もだまって、着換えをはじめた。

本堂から、まるみを帯びた、よくひびく鐘の音がきこえた。動行がはじまった。つづいて澄んだ、緻密な音がながれてきた。拍子木のようにであった。矢那子は帯もきものもとりに換えた。英資は服をきた。育子はちがった服をきた。

拍子木の音をたよりに、三人は奥書院を出た。庫裡から本堂への下廊下は、多くのひたに踏まれたせいか、板の色が変色して、何かを塗ったようにつやを帯びていた。本堂にはいるには、三段の階段があった。堂内の太い柱が先ず目についた。崇厳な雰囲気漂っていた。曜と伴僧の読経の声が流れていた。三人は広間の中央に進み、須弥壇の奥の厨子に向って、正面に坐った。母をまんなにした坐り方だった。母と姉が両手を合わせたので、英資も真似た。

うす暗い内陣に、無数の火がゆらめいていた。真鍮の器物に灯が反射して、美しかった。金箔をほどこした厨子も、重厚な感じ

であった。その中にまっ黒にすすけたような阿弥陀如来の立像があった。

「心泉寺の本尊は、鎌倉時代のもんです」

と、かつて曜がいったことを矢那子は思い出した。右手にも厨子があった。その中の仏像はよく見えなかった。

「いい声ね」

と、育子がささやいた。矢那子がうなずいた。伴僧の声は年齢らしくしゃがれていた。が、曜の声は低音で、一語一語の発音にねばり気がある、ひびいた。ねつとりとした若々しい低音と乾いた声が、うまい工合に調和していた。この声がききたかったと矢那子は思った。

「あなた方は、途中でお座敷の方に戻ってもいいですよ」

育子と英資にふり分けていった。母親らしい思いやりだった。が、自分ひとりで曜の声をきいていた気持ちがつよかった。

正面の曜は微動もしなかった。生きているのは、その低音の読経の声だけであった。正面と左右に内陣の畳が細長く敷かれていたが、伴僧はそこに坐ることが許されていないようである。伴僧は内陣から一段さがった余間に坐っていた。拍子木を叩いているのは、伴僧だった。住職と伴僧のふたりきりの場合にも、形式は厳守されている。

## 七

正座の足首のあたりをもぞもぞさせはじめたのが英資だった。ミニ・スカートだったが、育子はさすがに正座に慣れていた。十七歳のころから母の代稽古を勤めるようになっていた。

矢那子が英賢にうなずいてみせた。そして育子に、中座をすめるよううなずき方をみせると、ふたりは立ち上った。足音を殺して本堂の広間を去り、下廊下も注意してわたった。

矢那子は解放された。手放して曜をみつめることが出来た。ひいきの客が舞台の鳴神上人をながめるようであった。ひいきの客は、舞台の正面の掛軸に何が書かれているか、注意を払わない。役者の一挙手一投足に眸をしぼりつけられている。演技の上手下手は問題にならない。矢那子の五体に、低音の読経の音が快くひびいた。何が読まれているのか、わからない。肉感的な声が快いのだ。棒読みのようなだが、その中にも呼吸のような抑揚があった。拍子木がたくみなアクセントとなって、低音の肉声をつやのあるものに感じさせた。

——あれから十年になる。

と、矢那子思った。

大内薫資の遠縁が、丹阿弥市の心泉寺の檀家であった。その紹介で、曜が矢那子の家に下宿することになった。大内が死んで、三年目であった。小学生のふたりの子供をかえた矢那子は、曜が下宿してくれることを歓迎した。素性が知れているので、安心だった。十九歳の曜は、どこか去勢されたようなところのある清潔な青年だった。ひとり子で育ったせいかもしれないが、寺院育ちのせいだと納得出来た。

終戦後、世相が変わり、檀家のすくない末寺は食べていけない。寺院を維持することが困難になった。住職が学校や役場につとめるようになった。末寺の子女は、寺を捨てて行くようになった。坊主と医者や長袖育ちといわれていたのは、遠い昔のことにな

なった。檀家に寄生した末寺のあり方は、もともと不自然な存在であった。きびしい現実が、その不自然さをたすことになった。昔のように宗教が大切でなくなったからだ。形式だけを守ってきた本堂は、屋根や天井が崩れ落ちて、青空がながめられるようになった。本堂をこわすにしても、金がかかる。本堂は自然が破壊するままに捨てられている。寺院の人間も食べるために寺院以外に働かなければならない時代になった。檀家に寄生することによって、去勢されたようなおとりとした人柄では、もはや今の現実では生きていけない。矢那子にも、そういう知識があった。

「心泉寺は、ふところのゆたかなお寺さんですってね。檀家によりからなくとも食べていける財産家なんですってね」と、矢那子が訊いた。

## 八

そのとき、曜が心泉寺の内情を説明した。

「何代か前に心泉寺にお嫁にきたひとが、持参金として山を持ってきたのです。それ以来、心泉寺は寺領以外の山を所有してたんです。明治維新の寺領をかえすというさわぎのときにも、その山は除外されました。山といっても丘陵地帯にすぎないんだけど、寺では持てあまし気味でした。丹阿弥市は工業地帯として急激に発展しました。昔は四万そこそこの人口だったのに、二十万近くにふくれあがって、丹阿弥市の郊外はひろがる一方、しまいには丘陵地帯が造成されて、家が建つようになりました。持てあま

し気味だった土地が、お金になった。丹阿弥市の戦災で焼失した寺々が、いまだに再建が出来ないでいるのに、心泉寺だけが檀家にたよらず、ぬくぬくとくらしていられるのは申訳がないのです。しかもその上、心泉寺の檀家には、お百姓が多くて、それがみんなお金持です。土地が買い上げられて、工場が建つようになったから、檀家のふところがゆたかになれば、寺の内容もゆたかになります。皮肉な現象です」

鈴鹿山脈を西にして、東に伊勢湾をひかえた丹阿弥市は、今後も発展をつづけるといわれていた。本堂の読経はつづいていた。矢那子は、うつとりと曜の声をきいていた。

「育子を心泉寺のお嫁さんにもらってもらおうかしら」と、矢那子がまじめに曜にいったことがある。「育子が十八、九になれば、曜さんは二十七、八でしょう。結婚にふさわしい年齢だわ」

それが嘘でない証拠には、

「こんなつもりではなかったのに……」半ばひとりごとのように、いまいましがるように、あきらめたひとのように矢那子が呟いた。

「こんなになつては、もう駄目ね」

それは寒い季節であった。曜が友達と忘年会をやった。夜おそく帰宅したとき、泥酔していた。

「よくまあ、かえっていく先をわすれなかったですね」

矢那子はよろめく曜のからだを支えて、二階に上った。

「ほく、酔ってませんよ。しっかりしてますよ」

酔った人間にかぎって、そういうものだと思いながら、矢那子は

見かねて、曜の上衣を脱がしにかかった。ねまきをひきよせ、立膝になり、バンドを外してやった。自分でズボンを脱ごうとするのだが、からだがよろめくので、うまく脱げなかった。矢那子の肩を支えにして、足を抜いた。肩先に全身の体重がのめりこむようであった。よろめきながら、はなれていこうとする曜をとらえて、矢那子はねまきを着せた。母親が幼い子供の帯をしめてやるように、立膝をし、抱きよせた。

「こんなのにむなんて、毒ですよ」

## 九

目が血走っていた。目尻が吊りあがってみえた。おとなしい曜の一面をみせつけられて、矢那子はおやと思った。

「お休みなさい。明日になったら、ゆうべはすみませんでしたとあやまる曜さんの顔がみえるようです」

笑いながら床に誘ったが、中心がとれず、よろめいているので、抱いて、床の上に寝かしつけた。酒がさせるのか、曜が矢那子に抱きついた。仰向けに寝てからも、手をはなさなかった。その手をひとつひとつ外した。

「枕許におひやがあります。喉がかわきますよ」

かけぶとんの肩のあたりをやさしくおさえてから、矢那子は立ち上った。朝までぐっすり眠るであらう。酒がのめないたちではなかったが、深酒の経験はなかったようである。

矢那子は床にいった。左右の床に、育子と英資が眠っていた。階段で重い荷物をはこぶような物音をたてたが、目をさまさなかったようである。矢那子はうとうとした。そして目がさめた。